

SEG®
英語多読
授業見学
レポート

英語の発音への理解を深め 基本文法も含めて 英語を読む力を伸ばす



SEGは数学の専門塾としてスタートし、理数系に強い塾として高い実績を誇る。ただ、近年は「英語多読」というユニークな授業方法を採用する英語塾としての評価も高まっている。大学入試だけでなく、ネイティブに近い本物の英語力が身につくことが分かってきたからだ。中1からSEGで英語を学び始めた生徒が在学中に英検®1級を取得するケースも少なくない。一体どんな授業を行っているのだろうか。前回の外国人パートに続き、今回は多読パートを紹介しよう。

イギリスの「国語」の教科書を使い ネイティブ同様に英語力を鍛える

SEGの英語多読は、多読パートと外国人パートで構成されている。多読パートは、文字通り英語の本を大量に読む授業で、自分の興味や英語のレベルに応じた洋書を先生にピックアップしてもらいながら徐々に興味の幅を広げ、英語の読解力を高めていく学習法を採用している。一方の外国人パートは、外国人講師との英語でのやりとりを通して、英語のリズムや英語特有の言い回しなどを、五感を通じて体感していく授業だ。これら2つのパートをセットにした授業で、「本当に使える英語」を身につけることを目指している。

今回取り上げるのは、新中1の春期講習での多読パートだ。中1になる前の春休みに開講されるため、厳密に言えばまだ中学入学前の小学生が受講していることになる。公立小学校では小3・4の「外国語活動」、小5・6の教科「外国語(英語)」で英語に触れてはいるものの、本格的に英語を学ぶのは中学に入ってからという人は多いだろう。今回参加したのは、前回に引き続き、小学校である程度英語を学んだ生徒を対象とする中級クラスだ。ではさっそく、授業の様子をのぞいてみよう。

授業を担当するのは、SEGの代表でもある古川先生だ。始業チャイムはなく、「では時間になりましたので始めましょう」という先生の一言で授業がスタートする。すでに生徒の机の上には英語の絵本が置かれていて、今日は課題として *Hide and Seek*、*Look at Me*、*Go Away, Floppy* の3冊を読むようだ。ORT (Oxford Reading Tree) と呼ばれるシリーズで、イギリスの小学校の8割以上で採用されている「国語」の教科書である。3冊はいずれも大きな活字の絵本であり、おそらく「国語」の教科書としては小学校低学年向けだろう。



英語多読のポイントは、自分の興味とレベルに応じて好きな洋書をどんどん読み進めていくことにある。だが、今回のような学び始めの段階では、全員が基礎的な力を身につけられるよう、みんなで同じ絵本を読んでいくようだ。

※英検®は、公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

先生は本のタイトルを板書し、その横に 35×3=105 とか 27×3=81 といった数字を書いていく。左の数字はその本の語数(1単語で1語)で、それを3回くり返して読むので、合わせて右側の数字の語数を読んだということになるらしい。生徒たちは、全員に配布されているオレンジ色の「読書記録手帳」にタイトルと読んだ語数を書き込んでいく。こうして、本を読むたびに読んだ語数を記録していきながら、100万語の読破を目標に多読を続けていくわけだ。ほとんどの生徒は卒業までに100万語を軽く超え、500万語を読破する生徒も少なくない。なかには1000万語を達成する猛者もいるそうだ。

音声とともに読むことで 英語の読み方を体得する

最初に読む絵本は *Hide and Seek*。まず1回目の読み方として、ネイティブが絵本を朗読しているCDを聴くことから始める。生徒はCDから流れる音声を聴きながら絵と文字を目で追っていく。それぞれの場面に応じて、話し手はイントネーションや音の強弱を強調しているようだ。「Can you see me?」「Can you see us?」「Yes, I can see you.」「Yes, we can see you.」など、文字だけで見るとまったくの初学者が理解するには難しそうな内容である。



1冊分の音声を聞き終わると、古川先生は「さて、どんなお話だったでしょうか。題名の意味はわかりますか?」と生徒に問いかける。生徒は口々に「かくれんぼ」と答える。難しそうな文章だったが、それを表している分かりやすい挿絵があることもあって、きちんと内容が理解できているようだ。先生は「そうですね。hideは隠れる、seekは探すという意味ですね。最初に隠れないと探せませんから、「hide and seek」で「かくれんぼ」ということになります」と説明し、「Can you see me?」だけではどちらか分かりません。ただ「Yes, we can.」と返事をしていることから、このシーンでは「あなたたち」とらえることができますね」と、文章の解釈の仕方についてもさりげなく触れる。

2回目の読み方は、CDに合わせての音読だ。CD音声のイントネーションだけでなく強弱も含め、生徒はそ

れぞれに声を出して読んでいく。3回目も、同様にくり返す。CDの音声を聴くこと、そして口に出してその音声を真似ること、英語が単なる知らない文字ではなく、音声を伴った言語として認識されていくことになる。

黙読・音読合わせて3回読み終わると、生徒たちは「読書記録手帳」に読んだ絵本の感想を書き込んでいく。感想を書くことで、読み飛ばすのではなく、内容理解を伴いながら読むという意識を定着させているのだろう。その間、古川先生は「hide and seek」はホラー映画の題名にもなったりしていて、アメリカでもポピュラーな遊びですね。など、言葉の広がりを感じさせるような情報も加えていく。

2冊目、3冊目も同様にして読み進め、感想を書き込む。このなかで古川先生は、「see」と「look at」の違い、「look at」から派生して「look for」や「look after」の意味に触れたほか、「We are skipping.」のように「be動詞+ing」で「～している」という現在進行形になること、be動詞は主語によって「are」「am」「is」と変化することなど、中級クラスということもあり、初歩的な文法にもふみ込んでいた。

本日の課題である3冊を読み終わると、読んだ本に関する問題プリントが配られる。穴埋め問題や日本語で答える問題などがあり、古川先生やチューターが机を回りながら採点をしていく。どうやら、全員が満点だったようだ。

発音のルールも学び 耳と目で英語力を高める

続いて、有声音と無声音の説明だ。まず「英語のアルファベットには、のどがふるえる音(有声音)と、息だけの音(無声音)がある」という説明を英語で行っている動画を見た後、古川先生が「日本語はのどがふるえる音ばかりですが、英語には息だけの音があります。これは結構重要で、かつとても役に立ちますね」と解説を加える。続けて、a から z までのアルファベットを、ネイティブが有声音と無声音を意識して発音している動画を流し、生徒がその後について発音する練習を2回くり返した。



「複数形の「s」や三人称単数の「s」、過去形にするときに付ける「ed」などの発音に大きく関わっています」と古川先生。黒板に、複数形の「desks」と「doors」、三人称単数の「He walks.」と「He plays.」、過去形の「He walked.」と「He played.」を並べて書き、語尾の「s」や「ed」の直前のアルファベットが無声音なら「s」や「ed」は無声音、逆に有声音なら有声音になることを示し、「どんなルールにも例外はあるものですが、このルールには例外がありません。なぜなら、発音しにくいからですね」と解説した。これには驚いた。こ

れまで発音の違いは動詞ごとに覚えるものだと思うから。こうした言語の根源的な働きの理解をベースに、耳と目で読むトレーニングをするからこそ、英語力が飛躍的に伸びるのだと得心がいった。

次は、*Snow Man*を全員で読む時間だ。最初はやはりCDの音声を聴くことからスタートする。1文ごとにCDを止めては、今説明したばかりの無声音と有声音の関係に例外がないことを示しつつ、分かりにくい単語の意味も説明していく。そして、CDの音声に続けて音読を2回くり返す。*Snow Man*は語数137語の本なので、3回くり返した411語を「読書記録手帳」に書き加え、さらに感想を書いて、全員で同じ本を読む時間が終わった。



80分ある多読パートのうち、ここまでで45分。残りの時間は個別読みの時間となり、それぞれのレベルや関心に応じた洋書を読むことになる。読む本は一人ひとり違うが、絵や写真が豊富な絵本が多く、どの本にもCDが付属している。CDプレイヤーは教室に人数分用意されており、生徒はヘッドフォンやイヤホンを持参するだけでよい。個別読みでも3回読みを推奨しているようで、1回目はCDを聴き、その後2回はCDに続いて音読を行い、感想と語数を記録していく。まだ薄い絵本を読む生徒が多いため読み終わりが早い生徒も少なく、そのような生徒の机には、古川先生が次に読む本をどンドン置いていく。こうして、集中して英語の本と向き合う時間が流れていく。



学年が進むにつれて多読パートの大半は個別読みの時間にあてられるようになる。生徒は自分のペースで英語の本を読んでいくことになるが、そのためには英文を英語のまま理解していく力が不可欠になる。辞書を引かず洋書を読めるようになるには、こうした絵本を通して英語の意味をビジュアルから理解していくことがとても重要なのである。SEGの「英語多読」は、英語圏の子どもが母語を獲得していくのと同じような方法で英語の力を身につけられる授業なのだと感じてきた。

SEG 英語多読

受講生の声

中学入学を控えたみなさんは、なぜ「英語多読」を選んだのでしょうか。授業の感想、将来の目標なども含めてうかがいました。

英語でハリー・ポッターを 読んでみたい

英語の本を読むということをテーマにした授業はほかにはないため、楽しそうだなと思い春期講習を受けることにしました。まだ3日しか受けていませんが、多読パートでは思ったよりもたくさん英語の本を読むことができたので、受けて良かったです。中学受験の勉強を始める前まで通っていた英語教室でも英語の絵本を読んではいましたが、今日までの多読パートの授業だけでそのとき読んでいた本の量を超えてしまった感じがして、驚いています。いずれは日本語で読んだ「ハリー・ポッター」を原書で読めるよう頑張りたいです。

◆ A.T. さん (筑駒)



得意な英語をもっと得意にしていきたい

中学受験が終わってからタブレットを見てばかりだったのですが、このままだと良い成績が取れないのではと不安になり、早めに習い事を始めようとして塾に通うことを決めました。最初は別の塾を考えていましたが、小学校の頃に英語教室に通っていたことからSEGの「英語多読」の授業が気に入り、親と相談して受けてみることにしました。これまで塾ではあまり話す方ではありませんでしたが、SEGでは先生方がみなフレンドリーで、気軽に話すことができるのが良かったです。SEGに通い続けて、得意な英語をもっと得意にしていきたいと思っています。

◆ A.S. さん (晃華学園)



<https://www.seg.co.jp/>

03-3366-1466

【月～金】14:00～21:00 【土】13:00～21:00
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-19-19

中学1年～大学受験
科学的教育グループ

SEG®